



丸山健人著
高層天気図を描く

新草出版, B 5, 169頁, 1,800円

余人には真似のできない懇切さに満ちた天気図の解説書である。この種の本は、記入型式の簡単な説明のあと、天気図の型を中心とした天気図の解説に多くの紙面を費やすものが多く、全くの初心者がいざ自分でやってみようと思うと、どうやって等圧線を引いたら良いのか見当もつかないという場合が少なくない。その点、本書は何の予備知識がなくても、導かれるままに作業を進めていけば、最後には一枚の高層天気図が仕上がる仕組みとなっている。

第1章で地上・高層天気図の意味を必要最小限に示したあと、第2章では高層の観測電報の解説から等高線・等温線の描画までを、こうまでせずとも思うくらいに、それこそ手取り足取りといった懇切さで、或る日の実例をあげて700mbの解析をやっている。観測電報の読み下し文までついているので、多少負担に思っても一つ一つ電報と対比させて見れば、読み終わる頃には一通りの電報の読み方が頭に入る。実習用の天気図用紙から、700mbの全データリスト、プロット・解析の模範例(3色刷)まで揃っているから、ともかく実際にやってみようという意欲をそそられる。第3章は特異点資料の解説で、垂直断面図の作成を理解させようという意図と思うが、これは少し初心者には難しいかもしれない。以下、第4～7章は、高層観測の実際からそれを基礎とした高層天気図の意義を述べた比較的一般的な話となるが、傾圧波の説明などに成層圏赤道波動の専門家としての著者の巧みな語り口が見られる。最後に補章として、JMGを受信する方法や地上気象通報式の解説、さ

らには一年分の700mb天気図を付録として収録するなど、ここまでくると、著者のほとぼしするような熱意に圧倒される思いである。

本書は単なる懇切さだけの一般むけの解説ではなく、著者の主張は、気象資料を一般の人々がどんどん利用することが、それを開かれた資料として維持することに役立つのだというところにある。そのためには、誰もが判る資料として身近になければならないという発想が、これほどまでに懇切極まる解説に仕上げたと言えるだろう。

近年、客観解析の進歩で、気象台の予報官といえども手描きで天気図解析をする機会は極めて少なくなってきた。そのなかで、一般の人々が高層天気図に親しむことはなおさら少ない。しかし、昨今の予報解説、火山噴出物による気候への影響、原発事故による汚染質の輸送など、近年、上層の流れが一般の人々の話題にのぼる機会は逆に増えている。そうしたギャップに将来を危惧する声は小さくないが、本書がそれを埋めることに役立つなら、それこそ著者の望むところに違いない。

内容について欲をいうなら、二、三改善して貰いたい点もある。700mbの偏重は、一般に取得できるデータという面でやむをえないところもあるが、500mbあるいは地上との関連にもうすこし説明を加えて欲しかった。また、湿数の記入については換算の誤りを防ぐ意味で電報の数値のまま記入するように勧めているが、天気図の検討の際はかえって、2次元的な拡がりの分布を見にくくしている。ここは、やはり換算のうえ記入するようすべきだろう。

多少、瑣末な事柄に触れたが、ともあれ、本書が多くの人に読まれ、高層天気図が世間の常識となることを期待したい。

(気象大学校 足立 崇)

国際学術研究集会出席補助金受領者の選考結果について

標記のことについて、3件の応募があり、選考の結果次のように決定したのでお知らせします。

氏名	所属	補助金額 (千円)	出席究研集会	開催地	開催年月日
中沢哲夫	気象研究所	75	モンスーンとメソ気象学国際会議	台北(台湾)	1986年11月4日～10日
新野 宏	気象研究所	100	第3回成層流体に関する国際シンポジウム	パサデナ(米国)	1987年2月3日～5日
早坂忠裕	東北大理学部 大学院生	75	北京国際放射シンポジウム	北京(中国)	1986年8月26日～30日